

はじめに

昨年の創刊に続き、「子どもの福祉と心理」Vol. 2をお届けいたします。

この一年、様々な感染症の流行、災害、そして終わらない紛争など、私たちの日常を取り巻く不穏な情勢が続いています。このような時代に、改めて子どもの権利について、現場発信の意見に耳を傾けながら、思考を巡らせ、議論していくことの大切さを思います。

今号は、社会的養護の世界で、子どもの育ちを長く支えていくことを取り上げ、特集としました。「長く」とは、長く支え切った側からの視点もありますが、例えば乳児院などのように、誕生して間もない頃に、ほんのわずかな時間で育ちを支える側からも、その先の子どもの育ちを長く見守る視点が欠かせません。子どもたちの人生の伴走は、専門家がどんなに頑張っても、一人ではできません。社会的システムとしての切れ目ない支援は、子どもの視点ではどのように映っているのでしょうか。つながりや、永続性というものが、子どもにとってただの幻とならないようにするには、ずっしりと重い課題が残されています。

この他にも、現場発想の論考、リサーチ論文と共に、現場からのホットな声も取り上げられています。現場の声は、実践の本質を知らしめる上で強みであることに間違いありません。けれども草の根の現場サイドからの発信というものは、ある意味で「声なき声」となりやすく、耳を傾けてくれる賢者の存在無くしては、せっかくの声も日の目をみることができなくなってしまいます。

反対に、実践家にとって、それが間違いのない学術的知見であったとしても、すぐに現場の実践に活かすことが難しいことも多くあります。学問的な領域の間、様々な実践家同士の間、そして学問と実践の間というように、多分野交流には複数の次元があります。おそらく、子どもの福祉にかかわる多分野協働の取り組みが成果を上げるためには、これらの交流を粘り強く続けていくことが求められるのでしょう。

本誌においても、今後も児童福祉の現場を囲み、様々な意見も反映させながら、幅広い論考・研究、そして研究所の活動を継続して掲載していく所存です。

引き続き皆様のご理解、ご助力を賜りますよう、お願い申し上げます。

令和7年 夏

白百合心理・社会福祉研究所 所長
青木紀久代